

東日本大震災追悼式

東日本大震災から10年となる3月11日、「浪江町地域スポーツセンター」において、遺族・来賓合わせて57人の出席の下、浪江町東日本大震災10周年追悼式を行いました。式の始めに、参加者全員で黙とうをささげ、犠牲者の冥福を祈りました。

吉田町長は式辞で、昨年は、請戸住宅団地が完成し、「道の駅なみえ」がプレオープンを迎えるなど、町がにぎわいを取り戻してきていると実感した一年であり、今後も安心して生活できる持続可能なまちづくりを目指し、復興に向けて全力で取り組んでいく決意を述べました。続いて、遺族を代表して遺族会会長の川口 登さん（相馬市在住）が追悼の言葉を述べました。

追悼の言葉

遺族代表 遺族会会長

川口 登さん

本日ここに、多くの来賓および県内外から多くの遺族が集い、浪江町東日本大震災10周年追悼式が挙行されるにあたり、遺族を代表し、謹んで追悼の言葉を申し上げます。先の東日本大震災から、10回目の追悼式を迎えました。2011年3月11日、この風光明媚で穏やかな浪江町に、震度6強の大地震による15メートルを超える津波が襲来し、私たちのかけがえのない、大切な家族が大勢犠牲となりました。中には、津波から逃げるため、道なき道を懸命に走りながら、その途中で波にのまれ、命を落とした方。あるいは、家族の手を携え必死に逃げながらも、津波がその手を切り離し、一方だけが波にのまれた方。そして、大量のがれきに何とかしがみつきながら、途中で力尽き命を落とした方。また、地震により建物が倒壊し、その重みで体を圧迫され、命を落とした方もあります。



こうして大切な命が一瞬にして失われてしまった一方で、愛する家族が波にのまれていく惨状を目の当たりにしながら、どうすることもできずに、ただ見届け、立ち尽くすだけしかできなかった家族の無念さも決して忘れることはできません。最愛の家族を失い、絶望と無力感にさいなまれながらも、亡くなった家族の分まで必死に生きようと、慣れない避難先で歩んだこの10年間は、とてもつらくて苦しい日々の連続であったことでしょう。また、この10年の歳月は、一年一年の積み重ねが10年に達したものであって、私たちにとって、3・11の震災は、今もなお、延長線上にあると言わざるを得ません。

このような中であって、様々な人たちの思いを、私たち遺族は、次の世代へしっかりと語り継ぐ責務があります。震災を経験した私たち遺族の思いは、いつまでも変わることはないでしょう。

結びに、東日本大震災で亡くなられた方のご冥福を心からお祈りするとともに、参列者の皆さまのご健勝を心からお祈り申し上げます。

行方不明者の捜索が行われました

東日本大震災から10年となる3月11日、福島県警察本部主催による行方不明者の捜索が行われました。

捜索には、浪江町をはじめ警察・消防本部などの関係機関が参加し、「浪江町地域スポーツセンター」で集結式を行った後、棚塩地区に移動して捜索を行いました。

今回の捜索では、骨片が7点見つかり、福島県警察本部で確認を行っています。



がれきをかき分けて



関係機関が力を結集